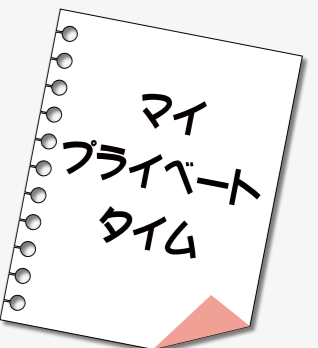


# キリマンジャロに登る

いちのみや  
一宮市長(愛知県) 谷 一夫  
Kazuo Tani



山好きの友人に誘われ、山登りを始めたのは50歳を過ぎてからのことです。だんだん深みにはまり、その内、海外トレッキングにも挑戦するようになりました。ネパールや北部パキスタン、天山山脈など、辺境の山を何度も訪れましたが、一番の自慢は憧れのキリマンジャロに登ったことです。市長就任の2年前のことでした。

## まずは予備知識を

キリマンジャロはとて有名な山ですが、そういう名の頂がある訳ではなく、キボ峰、マウエンジ峰など3つの峰を持つ大きな山の総称です。キボ峰はアフリカ大陸の最高峰で、最高点はウフル(独立の意)ピークといひ標高5895m。その200mほど下にギルマンズポイントと



キボ峰へ続く道

呼ばれる地点があります。このどちらかに到達すれば登頂証明書がもらえ、「キリマンジャロに登った」と威張ることが許されます。

キボ峰はアイゼンやピッケルなどの特別な道具や登山技術がなくても登れる、世界で最も高い山といわれています。そうはいっても富士山より2000mも高く、高度障害は必発です。山頂の気温はマイナス5度から10度、風が吹けば体感温度はさらに下がるといふ、さまざまな不安を抱えての山行でした。

## 第一歩を踏み出す

登山の開始は標高1860mのマランダゲート。国立公園事務所で入山手続きを済ませると、胸を躍らせながら山頂への第一歩を踏み出すことになりました。通常のルートは1000mごとに3つの山小屋があり、特別の許可を取ると3700mの小屋で2泊することが出来ます。こうすることで高度順応が図れ、成功率が高くなるのです。

ガイドは英語が話せるので、片言の会話力でもほとんど不自由は感じません。私たちはその日に必要な装備だけを背負い、寝袋、防寒具、着替えなどはポーターが運んでくれます。

樹林帯を抜け草原帯が尽きると、目の前にキボ峰とマウエンジ峰が姿を現しま

目の前に特徴のあるマウエンジ峰がそびえています。3時を過ぎるとガスが出て山すそを覆い、夕日があたる山頂が輝きだしました。太古の昔から、人々が神として山を崇めた気持ちが分かるような気がする瞬間です。

## ギルマンズの頂へ

午前1時。あるだけの防寒具を身に着けた一行11人が、4人のガイドを交えて、いよいよ山頂を目指す時間がきました。昨日までと比べると傾斜はかなりきつく感じます。ヘッドランプの光の輪だけを見つめて、苦しいのはみんな同じだと



山頂での記念写真

「もう下りたい」と何度もトマシに言うのですが、暗闇の中で目だけ光らせ、「ノー、ゴーアップ」と、にべもありません。その迫力は黒鬼のようでした。考えてみれば、暗闇の中を下るのは危険だし、その場で夜明けまで停滞することは寒くてできないし、こんなところへ来てしまった自分を呪いながら、どんなにゆっくりでも歩き続けるしかないのです。疲れきって岩に腰を下ろした途端、激しい嘔吐が込みあげてきました。時計を見ると4時半です。標高はもう5000mを超えています。ふと頭を上げて、思わず息をのみました。丸い地平線に沿ってオレンジ色の帯が2本、うすいブルーの空を染め、マウエンジ峰のシルエットがくっきりと浮かんでいます。キリマン



夕照のマウエンジ峰

した。美しい。しかし、遠い。あんなところまで登れるだろうか、だんだん心細くなってきました。4日目には4703mのキボハット小屋まで約1000mの高度を稼ぎます。いよいよ未経験の高さに挑戦です。この辺りから草木は姿を消し、小石まじりの砂と岩の世界に変わっていきます。マウエンジ峰を右にキボ峰を正面に見ながら、緩やかな登りが続きます。青空が抜けるように高く、日本では想像もできないスケールの大きな風景が広がっていました。

ゆっくりゆっくりブラブラ歩きで進むのですが、酸素が薄くなり呼吸が苦しくなってきました。高山病の症状である食欲不振や吐気もますます強くなってきました。7時間ほどで目指す小屋に着きました。

ジャロの日の出です。山頂はすぐそこだ、とトマシが指をさしました。標高差にして50mくらいでしょうか。左腕をトマシに引かれ、右手にストックをついて、引きずられるようにして登りました。7時20分、やっとの思いでギルマンズポイントに到着。頂上氷河が朝日に輝いて、睡眠不足の目にしみます。「あなたは海拔5685mに到着した」と書かれたボードの前で、居合わせた外国人登山者と記念写真を撮り合ううちに、いつしか疲れも忘れていました。

アフリカではサファリも楽しみました。キリマンジャロはもう結構ですが、時間が取れるようになったら、今度はつれあいて一緒にもう一度サファリに行きたいと思っています。



子象を守る象の群れ